

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 31 日現在

機関番号：34701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770165

研究課題名(和文)『篆隸萬象名義』校訂研究

研究課題名(英文)A Study of Revised Edition of the Tenrei bansho myogi

研究代表者

大柴 慎一郎(OHSHIBA, Shinichiro)

高野山大学・文学部・研究員

研究者番号：20454803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：当該研究は、弘法大師空海が編纂した現存する日本最古の漢字字書である『篆隸萬象名義』(高山寺本)の校訂研究を行ったものである。『篆隸萬象名義』は基本的に唐写本の『説文解字』と『玉篇』を一つにまとめた字書である。その中には小篆・古文・籀文・俗字などの字体・字形が含まれているが、その伝本である高山寺本(国宝)には多くの誤字脱字が存在し、使用するに堪えない。従って、本研究は原本『玉篇』残巻や『開成石経』などの資料を用いて『篆隸萬象名義』の校訂本を作成し、現代にこの日本最古の字書を復活させることを目指したものである。

研究成果の概要(英文)：This study is on making a revised edition of Tenrei bansho myogi(篆隸萬象名義) edited by Kobodaishi kukai(弘法大師空海) which is the oldest Kanji dictionary still extant in Japan. Tenrei bansho myogi is a dictionary which is basically composed of a manuscript copy of Shuowenjiezi(説文解字) and Yupian(玉篇) dating from the Tang dynasty. There are lots of different characters such as Xiaozhuan(小篆), Guwen(古文), Zhouwen(籀文) and simplified Chinese characters(俗字) in it, but the Kozanji(高山寺) version, the only one of its kind extant and also a national treasure in Japan, is full of wrong letters so that we can't use that version. Therefore, this study tried to make a revised edition by comparing with Yupian, Kaichengshijing(開成石経) and so on to revive that oldest dictionary of Japan in our time.

研究分野：古文字学

キーワード：篆隸萬象名義 小篆 古文 籀文 俗字 『玉篇』 『説文解字』 『古今文字譜』

1. 研究開始当初の背景

我が国に現存する最古の漢字字書である弘法大師空海編纂の『篆隸萬象名義』は、高山寺本(平安時代写・国宝)が唯一の伝本であり、その他の写本は高山寺本の転写本である。また、諸々の弘法大師全集に載せる『篆隸萬象名義』は皆、高山寺本の影印本であり、わが国において未だ翻刻されていない。

『篆隸萬象名義』は中国において、呂浩氏の『篆隸萬象名義校釋』(学林出版社、2007)が出されているが、その翻刻本には少なからず問題が見られ、正確性に欠けていると言わねばならない。

研究者は中国国立中山大学に国費留学し、中国語文学系漢語言文字学専攻博士課程において『篆隸萬象名義』全六帖をデータ化した。本研究はその時に作成した1300頁の草稿本を基に、文字学(小篆・古文・籀文並びに積義の俗字)・音韻学(反切部分)・訓詁学(積義部分)によって校訂し、更に現代の国民の使用に堪えるべく古訓と各項に関連する挿絵を加え、わが国初の『篆隸萬象名義』の出版を目指すものである。

2. 研究の目的

『篆隸萬象名義』は弘法大師空海によって編纂された我が国に現存する最古の漢字字書であり、本研究の目的は『篆隸萬象名義』を翻刻校訂し、現代に復活させることにある。

3. 研究の方法

校訂の前提条件として、研究者は中国中山大学にて『篆隸萬象名義』における俗字の研究をしており、これによって『篆隸萬象名義』全帖における誤字と俗字を判別することができるようになり、一通りのデータ化を終えた。その上で、以下の如き過程を踏む。

(1) 文字上の校訂

これは『篆隸萬象名義』に記されている小篆・古文・籀文を対象とする。研究者の統計によれば、小篆は1013字、古文は51字、隸定古文は510字、籀文は10字、隸定籀文は117字である。そして①小篆の校訂に関しては、唐寫本『説文』の口部と木部の残巻、李陽冰の小篆、宋本『説文』などと比較し、②古文の校訂に関しては、李守奎編著『楚文字編』(華東師範大学出版社、2003)、郭忠恕・夏竦編『汗簡 古文四声韻』(中華書局、1983)、杜從古撰・丁治民校補『集篆古文韻海校補』(中華書局、2013)などを用い、③籀文の校訂に関しては、呉大澂・丁佛言・強運編輯『説文古籀補三種』(中華書局、2011)、『古籀彙編』(上海書店出版社、1998)などと校合する。

(2) 音韻上の校訂

これは『篆隸萬象名義』の反切部分の校訂を指す。反切の校訂には、①原本系(唐寫本)『玉篇』の反切、②周祖庠著『篆隸萬象名義

研究』(寧夏人民出版社、2001)、郭萍著『篆隸萬象名義』反切考』(中山大学博士論文、2005)などを用いる。

(3) 訓詁上の校訂

これは『篆隸萬象名義』の積義部分を指す。この校訂には、①原本系(唐寫本)『玉篇』の積義、②『類聚名義抄』「弘云」部分、③呂浩著『篆隸萬象名義校釋』(学林出版社、2007)、④商艶涛著『篆隸萬象名義』積義上存在の問題研究』(河北大学修士論文、2003)、⑤『開成石經』などを用いる。

(4) 異体字の校訂

これは『篆隸萬象名義』の積義の末尾に記されている異体字を指す。この校訂には、①徐在国著『隸定古文疎證』(安徽大学出版社、2002)、②由明智著『篆隸萬象名義』的異体字研究』(北京師範大学博士論文、2006)、③呂浩著『篆隸萬象名義校釋』(学林出版社、2007)などを用いる。

4. 研究成果

『篆隸萬象名義』の校訂作業は、反切と異体字の一部を残してほぼ終えた。更に精度を上げるには、校訂資料の増補が必要であるが、おそらくは際限なく加えることが可能であり、何処にて区切りを着けるかが肝要となる。主な研究成果は以下の如くである。

(1) 統撰者の惹曇三佛陀に関して

『篆隸萬象名義』は第五帖の冒頭に「續撰惹曇三佛陀」とあることから、第五帖と第六帖は惹曇三佛陀が編纂したと考えられる。この「惹曇三佛陀」(jñāna-sambuddha)は僧名を梵名と化したものであり、先行研究では「智覚」に比定されていた(築島裕「高山寺蔵本『篆隸萬象名義』」『弘法大師空海全集』7、筑摩書房:581)。この僧名は血脈に見られず、疑問であったが、研究者は『血脈類聚記』に「慧證大徳」を見出だした(『真言宗全書』39:45)。僧名が「慧證」であるならば、これを「惹曇三佛陀」としても大過はあるまい。また、慧證師(生没年不詳)は真然師などと共に列挙されていることから弘法大師の直弟子と考えられ、弘法大師の『篆隸萬象名義』の編纂作業を知り得る時代にいる。

(2) 懸針篆・古籀文の分析

『篆隸萬象名義』所出の小篆は懸針篆と呼ばれ、唐寫本『説文』の残巻である口部と木部と同じである。しかし口部と木部の小篆の字体を分析するに異同が確認され、『篆隸萬象名義』の懸針篆は口部のそれと一致することが明らかとなった。これに玉箸体の小篆である李陽冰と宋本の『説文』を加味し、唐代におけるこれらの小篆の前後関係を考察するに、おそらくは、『篆隸萬象名義』・『説文・口部』懸針篆→李陽冰『説文』玉箸体→『説文・木部』懸針篆→宋本『説文』玉箸体の変

遷が想像される。

また『篆隸萬象名義』の小篆は、大徐本『説文』の小篆との構造の異同によって大別され、大徐本と相違する中でも、①秦文字と字体が一致する小篆、②古文・『碧落碑』などの楚文字と字体が一致する小篆、③避諱に関係する小篆、④後起の小篆に細分化される。

一方、『篆隸萬象名義』の古文もその来源を考察するに、単一ではないことが知られる。すなわち、①金文・戦国文字に由来する古文、②『説文』の古文に由来する古文、③『説文』の小篆に由来する古文、④『説文』の或体に由来する古文、⑤『説文』の説解に由来する古文、⑥漢代以降の後起と思われる古文、に分類することができるだろう。

また、隸定の古文と籀文の中には、隸定の後に更に俗字化しているものが窺える。一例を挙げれば、「役」字は「役」字の隸定古文であるが、『篆隸萬象名義』は「役」が俗字化した「𠄎」となっている。

(3) 原本『玉篇』残巻のデータ化

『篆隸萬象名義』とは、実に唐本『説文』と原本系(唐寫本)『玉篇』(原本『玉篇』と略す)を併せたものであり、原本『玉篇』は『篆隸萬象名義』と最も直接的に関係するテキストである。原本『玉篇』は凡そ八分の一の文量のみが現存する残巻であり、これも未だに翻刻校訂されていない。上述の如く、原本『玉篇』は『篆隸萬象名義』を校訂する上で不可欠であり、両書は相補関係にあって互いに校訂に資する故、研究者は今回、『篆隸萬象名義』の校訂と同時進行で原本『玉篇』も翻刻校訂した。原本『玉篇』の校訂本は『篆隸萬象名義』の前に出版したい。

(4) 目録と本文との反切の相違

高山寺本『篆隸萬象名義』は目録が付されており、540の部首とその反切を記す。しかし、その中には本文の部首の反切と異なるものがある。例えば、「示」字は「𠄎至反」(目録)・「時志反」(本文)であり、「勿」字は「無鬱反」(目録)・「無弗反」(本文)である。ここから、目録は弘法大師が作成したのではなく、後世の人物が付加したと考えられる。「〇〇反」とあって目次には原本『玉篇』が使われていることから、目録の付加は、おそらく平安時代だろう。

(5) 『古今文字韻』の発見

本研究初年目において、『篆隸萬象名義』の懸針篆に関係する資料を探していたところ、偶然に弘法大師が大唐から請来し、嵯峨天皇に献上したことが『性靈集』によって知られていた『古今文字韻』の写本(室町時代写)を発見した。『古今文字韻』は従前においては散逸文献と見做されていた。しかし今回、国立国語研究所、四天王寺大学恩頼堂文庫、東京大学史料編纂所、名古屋大学の四所において写本を見出だした。

『古今文字韻』の詳しい内容は大柴 2014に譲るが、『篆隸萬象名義』と関連する事項として、『古今文字韻』に収める21種類の雑書体の中に懸針篆が含まれていたことは真に幸いであった。懸針篆の作例は、我が国のみならず中国においても少ないゆえ、貴重な資料となるだろう。

『古今文字韻』の発見は新聞各紙やラジオに報じられ、NHK和歌山放送にも取り上げられた。そのおかげで初年目は『古今文字韻』の発表に追われ、本研究に従事することができなくなったことは遺憾である。

最後に一言加えれば、今回発見した写本の中で、四天王寺大学本(巻上)が最も上質である。上巻のみの欠本であるのが惜しまれるが、それでも重文に準ずる価値があると思われる。文化庁の披見が望まれる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計6件)

① 大柴清圓 (慎一郎)、「關於空海大師從大唐帶來的『古今文字韻』—在日本新出的抄本一」、『第二屆中國密教國際學術研討會論文集』、査読有、2巻、2013、1319-1325

② 大柴清圓 (慎一郎)、『古今文字韻』の研究—翻刻・校訂を中心に—付・人間文化研究機構国立国語研究所所蔵『古今文字韻』(影印本)、『高野山大学密教文化研究所紀要』査読有、27巻、2014、184-142

③ 大柴清圓 (慎一郎)、『篆隸萬象名義』小篆研究、『高野山大学密教文化研究所紀要』査読有、28巻、2015、126-97

④ 大柴清圓 (慎一郎)、『篆隸萬象名義』目録の校訂研究、『高野山大学大学院紀要』、査読有、14巻、2015、17-45

⑤ 大柴清圓 (慎一郎)、「京都毘沙門堂所蔵『(古今)篆隸文體』の研究(1)—翻刻・校訂篇—」、『密教文化』、査読有、235巻、2016、244-217

⑥ 大柴清圓 (慎一郎)、「大本山隨心院所蔵『秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法伝』について—東寺・真言七祖像の行状文との比較を中心に—」、『空海研究』査読有、3巻、2016、25-57

[学会発表] (計3件)

① 大柴清圓 (慎一郎)、「關於空海大師從大唐帶來的『古今文字韻』—在日本新出的抄本一」、第二屆中國密教國際シンポジウム、2013年6月28日~7月1日、紹興県会稽(中国)

② 大柴清圓 (慎一郎)、「京都毘沙門堂所蔵『(古今)篆隸文體』の校訂研究—『古今文字韻』との比較を中心に—」、平成27年度密教研究会學術大会、2015年7月10日~11日

高野山大学（和歌山県・高野町）

③ 大柴清圓（慎一郎）、「大本山隨心院所蔵『秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法伝』について一東寺・真言七祖像の行状文との比較を中心に一」、第二回空海学会、2015年9月5日、高野山大学（和歌山県・高野町）

〔図書〕（計1件）

① 大柴清圓（慎一郎） 他、人間文化研究機構、『連携研究「自然と文化」研究連絡誌 人と自然』6、2013、24-25

〔その他〕

『古今文字讃』の研究一翻刻・校訂を中心に一付・人間文化研究機構国立国語研究所所蔵『古今文字讃』（影印本）」、『高野山大学密教文化研究所紀要』27

https://www.koyasan-u.ac.jp/laboratory/publications/bulletin/pdf/kiyo27/27_ooshiba.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大柴慎一郎（OSHIBA Shinichiro）

高野山大学・密教文化研究所・専任研究員

研究者番号：20454803